### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	八幡の縁起類から見た『宇佐八まんのゆらい』
Sub Title	
Author	小野, 尚志(Ono, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication	1988
year	
Jtitle	三田國文 No.10 (1988. 12) ,p.43- 52
JaLC DOI	10.14991/002.19881200-0043
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00296083-19881200-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 八幡の縁起類から見た『宇佐八まんのゆらい』

# 小野尚志

の如き指摘がある。 寛文・慶長篇(桜井書店、昭18)に次『古浄瑠璃の研究』第一巻 寛文・慶長篇(桜井書店、昭18)に次との関係にある。そして、この点については既に、若月 保 治 氏 のとの関係にある。そして、この点については既に、若月 保 治 氏 の如き指摘がある。

る。之等が其原拠をなすものと思はれる。……(一〇七四頁)応二年刊山本長兵衛版の仮名草紙に、『八幡の本地』三巻があがあり、また『八幡の本地』と題する奈良絵本や、下つては承……既に源平時代のものかといはれてゐる絵巻に『八幡の縁起』

 また横山重氏も次の如く指摘している。

『八幡縁起』については、横山氏の『室町時代物語集』第一冊の

ಶ್ಠ

中の「八幡大菩薩御縁起」(村上学氏執筆)の項から引用する。しいが、いまは『日本古典文学大辞典』第五巻(岩波書店、昭5)、一の中野玄三氏の解説、或は宮次男氏の「八幡大菩薩御縁起と解題のほかに、『社寺縁起絵』(奈良国立博物館監修、角川書店、昭解題のほかに、『社寺縁起絵』(奈良国立博物館監修、角川書店、昭

起(平時平利生譚・箱崎松説話ほか)を付加している。諸本に輪伝説を省く等やや簡略化し、後半をやや増補、箱崎八幡宮縁-------『神功皇后縁起』系八幡宮縁起の前半の新羅征討部分の塵

より説話の出入り、順序に小差がある。……

作者は、『神功皇后縁起』系八幡宮縁起に拠った、ということに なる。以上辿ってきた道筋から考えれば、『宇佐八まんのゆ ら い』のる。以上辿ってきた道筋から考えれば、『宇佐八まんのゆ ら い』のところで『宇佐八まんのゆらい』には、この問題の塵輪が登場す御縁起』として区別された。 など様々の伝本がある)を内容により分類し、塵輪伝説等を本地』など様々の伝本がある)で内容により分類し、塵輪伝説等を本地』など様々の伝本がある)で内容により分類し、塵輪伝説等を本地』など様々の伝本がある。八幡縁起』(『八幡宮御 縁 起』『八幡

る。この点については後に触れる。 『字佐八まんのゆらい』と、いわゆる『八幡縁起』そ八幡宮縁起なのかの結論を得られずにいる。だが、 菩薩御縁起』が、『神功皇后縁起』系八幡宮縁起なのか、『八幡大た『八幡縁起』が、『神功皇后縁起』系八幡宮縁起なのか、『八幡大た『八幡縁起』が、『神功皇后縁起』系八幡宮縁起なのか、『八幡大大『八幡縁起』系八幡宮縁起』系八幡宮縁起』が、『本田りしていえば、以或は以上の様な結論でよいのかも知れない。先回りしていえば、以或は以上の様な結論でよいのかも知れない。先回りしていえば、以或は以上の様な結論でよいのかも知れない。

# \_

『字佐八まんのゆらい』(寛文五年刊)の作者、伊藤出羽掾の 拠事実に近い。それも、おそらく寛文四年刊本の『八幡愚童訓』でり事、そのほとんどを『八幡愚童訓』に拠っている、とする方がより事実に近い。それも、おそらく寛文四年刊本の『八幡愚童訓』がある。というよった八葉のお見がある。というよった八葉ののゆらい』(寛文五年刊)の作者、伊藤出羽掾の 拠

ごく始めの箇所を引用することから始めたい。略して、寛文四年刊『八幡愚童訓』上巻、「第二 御神楽之巻」の、童訓』の諸本の当該箇所の比較、といった道筋をとらずに、やや省重訓』の諸本の当該箇所の比較、といった道筋をとらずに、やや省

と考えてよかろうと思う。

记す。以下引用はこれにより、頁数などはP9L8~の如くによる。以下引用はこれにより、頁数などはP9L8~の如く以下〔大久保正編『国文学未翻刻資料集』所収、桜楓社(昭56〕中奉をおどろかし申給へ……(拙稿「八幡愚童訓」95頁8行目)

……さかきのえだに大鈴をつけて。山のだけにのぼりて朝廷の

この引用文中に見える「神奉」なる語は、見なれぬ語で(或はと

応義塾図書館

昭 33 りであろう。) に見える語である。(「奉」は、おそらく「達」のくずし字の読み誤に見える語である。(「奉」は、おそらく「達」のくずし字の読み誤訓』諸本は、この箇所は「神達」となっており、寛文四年刊本のみらした語があるのかも知れぬが)意味不明であり、他の『八幡愚童

ん丼すみよしのふじうの事」の中にも、 ところが、『字佐八まんのゆらい』の「第二」くわうぐう大 ぐ わ

って、伊藤出羽掾の拠った『八幡愚童訓』が寛文四年版であった、おどろかし給はば。……(『古浄瑠璃正本集』第五、「横山重校おどろかし給はば。……(『古浄瑠璃正本集』第五、「横山重校おどろかし給はば。……(『古浄瑠璃正本集』第五、「横山重校おどろかし給はば。……(『古浄瑠璃正本集』第五、「横山重校おどろかし給はば。……(『古浄瑠璃正本集』第五、「横山重校おどろかし給はば。……(『古浄瑠璃正本集』第五、「横山重校おどろかし給はば。……(『古浄瑠璃正本集』第五、「横山重校おどろかし給はば。……

る。……(『慶応義塾図書館蔵 和漢書善本解題』二四 頁、慶色を加へて、当時の仮名草子風に仕立てゝある点に 特 徴 が あ本にしてあるが、かなり忠実に原本によってゐる。但し所々新本にしてあるが、かなり忠実に原本によってゐる。但し所々新東文四年版『八幡愚童訓』について阿部隆一氏は、

**う隔たることはなかった、と想像される。** 

と述べておられるが、おそらくその通りで、その拠った写本からそ

幡愚童訓』であったと、常識的に考える方が、より自然であろう。 が拠ったものは、その一年何ケ月か前に刊行された寛文四年版『八 ない。だが、寛文五年に刊行された『宇佐八まんのゆらい』の作者 『八幡愚童訓』と同系統の写本を見ていた可能性は、無いとは言え 伊藤出羽掾が、寛文四年版『八幡愚童訓』刊行にあたって用いた それわがてう。あきつしまとよ。あしはら。なかつくにゝ。 **うと。申たてまつるは。にんわうのはしめなり。(横山重編『室** らかや。<br />
ふきあわせすのみことの。<br />
第二の御子。<br />
しんむてんわ なかみの。御代なり。かのぢじん五だい。ひこなき。さたけ。 かし。てんじん七だい。ぢじん五だい。以上。十二だいは。み

町時代物語集』第一、三二頁 井上書房

引用する。 次に、『神功皇后縁起』系八幡宮縁起の一本である『八幡 本 地』を りき、こくとふねりにして、壽命す千万さい也、しかるに神代 それ我てうあきつしまとよあしはらの中つくにと申は、 天神七代地神五代、つかう十二代は、みな神の御代にてありた

れは最後に附記するとして、その前に『八幡縁起』との関係につい 版『八幡愚童訓』の相当箇所を併記し、検討の資料としたいが、こ

『宇佐八まんのゆらい』が用いた八幡関係の記述は、そのほとん

に拠ったであろうと思われる主な箇所を例示して、これに寛文四年

以下に、『宇佐八まんのゆらい』が、寛文四年版『八幡愚 童 訓』

て、触れておきたい。

が『八幡愚童訓』に拠らない箇所がある。それは、『字佐八ま んの どを『八幡愚童訓』に拠っている、という意味のことを述べた。だ 縁起は、このほか二本あり、表記・文章に異なる所があるが、この 『八幡本地』で、おおよその目安にはなる。 『室町時代物語集』第一に収められた『神功皇后縁起』系八幡宮 ことの第二の皇子なり、神武天わらより、……(同上、一二頁) 申奉る、すなわち地神第五のおはり、うかやふきあはせすのみ

ゆらい』冒頭の部分である。

応二年刊『八幡の御本地』が、『八幡縁起』の唯一の刊本であるこ と(承応二年刊本の版木を用いた明治版はある)を思うと、これに ける。もちろん、これだけで両者の関連を考えるのは軽率だが、承 起の一本である、承応二年刊『八幡の御本地』の方に近い印象をう めてみると、どちらかというと、『八幡大菩薩御縁起』系八幡 宮 縁 上記の二系統の『八幡縁起』と『宇佐八まんのゆらい』とをなが

訓』の中には無い。この箇所の記述は、『八幡縁起』に拠っている。 の本に拠ったか不明であるが、始めに、村上氏のいわれる『八幡大 『八幡愚童訓』に拠ろうにも、これに相当する記述は、『八幡愚童 先に述べたように、伊藤出羽掾が、『八幡縁起』のいずれの 系 統 申奉るは。人わうの。はじまりたり。(P82上6~) ふきあわせすの。みこと、第二のわうじを。じんむ天わうと。 二代は。かみよたり。ぢじん五第。ひこなき。さたけうがや。 それわがてう。あきつしま。天神七だい。ぢじん五代。い上十

をはりて、人わうの御代となり、かのさいしよ、神武天わうと

害となる、承応二年刊『八幡の御本地』に記載の無い塵輪伝説を、 拠った可能性もまた考えられそうである。このように考えるとき障

冒頭の一ケ所と同様に、『八幡愚童訓』に記載のない次の箇所 かに『八幡縁起』に拠らなければ、有り得ない箇所は、先に示した 拠ったとすれば解決もつく。『宇佐八まんのゆらい』の 中で、明ら 『宇佐八まんのゆらい』が有する点については、『八幡愚 童 訓』に

そ此太子を。八つのはたをあらため。八まん太子と付給。。 まい下り。御そばに有し。まつのこずへに、かゝりける。扨こ 其時、ふしきや、こくうより。しらはた四つ、あかはた四つ、 (P8下L18~)

Ł くさのかげにても。よく!~まもりゑさせん。ばんし頼と、の 次に掲げる箇所くらいではなかろうか。 給ひて。御年五十二才を一せとし。ちうあひ天わう九年、 かの

ければ御棺のうちより。)まもりたてまつらん」(P印L4~)に拠 りとならせ給へと。生たる人にものをいふやうにくどき申させ給ひ 寛文四年版『八幡愚童訓』の「草のかけにても(御覧し。遠きまも 右引用文中、「くさのかげにても。よく!~まもりゑさせん」は、 へたつ。二月六日に。ほうぎよ也給ふ。(P87下L6~)

ぬ。」(同上、三二頁)に拠った、とすべきであろう。 で示せば、「ちらあひてんわら。九ねん。かのえ。たつ。二月六日、 六日に。ほうぎよ也給ふ。」の部分は、承応二年刊『八幡の御本地』 っていると思われるが、「ちうあひ天わう九年、かのへたつ。二月 (つくし。かしまのみやにおゐて。ほどなく) ほうきょ。お はん だが、少し気にかかる箇所がある。それは、『八幡愚 童 訓』にも

『八幡縁起』にも存する、干珠・満珠を借りる場面である。『宇佐

うに感じた両者の関係は、挿絵に注目するとき、疑問が<br />
生じる。

り、かぐらをそうしたまはば。げかいのりうじん。うかみいで それは、いかゝすべきぞ。さん候、かいちうに、ぶたいをは んその時。こいうけ給ふべし。(P92上14~)

八まんのゆらい』の当該箇所を引用する。

うに、八幡の縁起類で二場面の話を、『宇佐八まんのゆら い』は**一** ち、話が進んで、干珠・満珠を借り受ける場面が出てくる。このよ 征伐の為の梶取として、阿曇磯良を召しよせる所である。そのの 『八幡愚童訓』や『八幡縁起』で、海中に舞台をはる所は、

場面として記述している。これは、『宇佐八まんのゆらい』の 作者 るのみで、ここに問題とする図を載せないが、この中に翻刻され 重・松本隆信編 角川書店 昭57)は、図版を口絵にわずかに載せ か否か、という問題である。 が八幡の縁起類から離れていった、いわば創作ということになるの 『八幡縁起』中の一挿絵である。『室町時代物語 大 成』第十(横山 これも結論は得られないのだが、いま思い浮かべているのは、

番号99-29」も同じ)。 するかのように、上記の二場面を一図として連続的に描 い て いる る)の第四図は、先に掲げた『宇佐八まんのゆらい』の記述に符合 これは塵輪伝説を載せない『八幡大菩薩御縁起』系八幡宮縁起であ た、天理図書館蔵『八幡大菩薩御縁起』(請求番号93・5-38-1。 (これと同系統の国文学研究資料館蔵『八幡大菩薩御 縁 起』〔請求

地』では、これを別の図として二図にしている。文章が似ているよ 拠った可能性も有り得ると述べたが、この承応二年刊『八幡の御本 先に、『宇佐八まんのゆらい』が承応二年刊『八幡の御 本 **—** 46

珠・満珠を奉る図は無い。) 張り神楽を奏している所に、亀に乗った磯良が描かれる。だが、干張り神楽を奏している所に、亀に乗った磯良が描かれる。だが、幕を(寛文四年版『八幡愚童訓』の挿絵には、舞台は見えないが、幕を

あろう。が、いずれも想像の域を出ず、結論は得られない。が『八幡縁起』を何本か見ていた、とするのも、その想定の一つでこれについては、様々な場合が想定される。例えば、伊藤出羽掾

## \_

れる。全く舞台技巧の上からは間然する所のない作で ある」(前掲顕著であつて、又その目的を以て各段が仕組まれてゐるやうに思は機巧を用ひ、糸操を用ひ、盛に舞台効果をあげようとしてゐる跡が『宇佐八まんのゆらい』は、若月氏によれば「……演出上には、

書、一〇七三頁)という。

万治、延宝期に活躍した。その語り物ははじめは江戸浄瑠璃を年(一六五八)に受領、出羽掾藤原信勝を名告った。主としてあるが、大阪の太夫としてはもっとも先輩格の一人で、明暦四あるが、大阪の伊藤出羽掾であった。伊藤出羽掾は生没年未詳でたのが大阪の伊藤出羽掾であった。伊藤出羽掾は生没年未詳でたのが大阪の伊藤出羽掾であったとき、上方の人形浄瑠璃界にから

多用した宗教味の濃い作品を上演しはじめる。多用した宗教味の濃い作品を上演しはじめる。

寛文六 よこそねの平太郎

寛文七 阿弥陀本地 寛文七 きしぼじん十らせつ女のゆらひ

をつかんで虚空に飛び上る、第一段 黒雲と五色の雲が入乱れて火焰を放つ、怪物が武士ゆらい」についてみると、

第二段 討ち取った怪物の首が虚空を飛んで消える、河水がをつかんで虚空に飛び上る、

二つに割れ、水神、竜神が出現する、虚空より菩薩が天降

第四段 干満の二玉を使い、海を干潟にしたのち敵を誘い込第二段 舞楽の演奏につれて亀に乗った海神が海中より出現り老翁に変る、石が四天王に変り虚空に消える、

第五段 赤白の旗が八本空から舞い下りる、天皇の墓から多み、海水を満たして皆殺しにする

くの鷹が飛び出し、一羽は金色の光を放つ、宮殿の内陣が

鳴動し、薨去した天皇が出現する

いた。し、その見せ場をつらねて神功皇后の遠征という筋をかまえてし、その見せ場をつらねて神功皇后の遠征という筋をかまえてなど各段に糸からくり、機械からくりを応用した見せ場を設定

せていただいたが、この作品は、様々な『からくり』を用いた、な『宇佐八まんのゆらい』について言及された、ほぼ全文を引用さ

りう王たいめん」(第十図)、「たかあまた□□所」(第十一図)、「いいなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。諏訪氏論文を収めた『国かなか手の込んだ浄瑠璃であったようだ。

もしれない。

また、次の箇所は何に拠っているのであろうか。

摘されたところである。『宇佐八まんのゆらい』と八幡の縁起 類 と摘されたところである。『宇佐八まんのゆらい』と八幡の縁起 類 とについては、先に諏訪氏が"からくりを応用した見せ場"として指あるが、「このにわかつて。」は、この作品の新たな設定であり、後者みづ、二つにわかつて。」は、この作品の新たな設定であり、後者なづ、二つにわかつて。」は、この作品の新たな設定であり、後者なづ、二つにわかつて。」は、この作品の新たな設定であり、後者なが、二つにわかつて。」は、この作品の新たな設定であり、後者なが、二つにわかつて。」は、この作品の新たな設定であり、後者なが、二つにわかつて。」は、この作品の新たな設定であり、後者なが、二つにわかつて。」は、この作品の新たな設定であり、後者なが、二つにわかつて。」は、この作品の新たな設定であり、後者なが、二つにわかつて。」は、この作品のからい』と八幡の縁起類に、拠れているが、「いぞくともおわれにける」(第十四)、「いでくとも本われにける」(第十四)、「いたくとも本におは、大に関する。」のでは、第十四)、「いりう王たいめん」(第十四)、「いりう王たいめん」(第十四)、「いりう王たいめん」(第十四)、「たかあまた」(第十四)、「いるが、この作品のあまた」(第十一回)、「いるが、このでは、またいのである。」では、またいのでは、またないのでは、またいいのでは、またいのではいいのでは、またいのでは、またいのでは、またいのではいいのでは、またいのでは、またいのではいい

などとことごとしく言うよりも、作者の素養と言う方が適当なのか(同上P27L9~)などがある。もっとも、こちらの方は、典拠謡曲の「蟻通」(『宇佐八まんのゆらい』P2上L4~)や「高砂」『宇佐八まんのゆらい』の典拠としては、八幡の縁起類の他に、

作者の知識が如何なるものであったか、興味を引かれるところであた、たとへたり。定めて、御心。くるしく思召れん。……に、たとへたり。定めて、御心。くるしく思召れん。……に、たとへがは。国こがいりとて。さかさまに成。其時、かみ一しんに、かぎらず。ばんみんに至まで。たいないより。

ことができる。

縁起類から離れた箇所での、作者の比較的自由な創作態度を感じるの関係、主に、寛文四年版『八幡愚童訓』との対照により、八幡の

るが未詳である。

り方の程度は、さまざまである。 り方の程度は、さまざまである。 以下に、『宇佐八まんのゆらい』の本文を掲げ、それに相当する寛正四年版『八幡愚童訓』に拠ったとしてよいと思う。ただ、その拠し、おそらく『八幡愚童訓』と『八幡縁起』とに、共通する説話が多く、しれない。『八幡愚童訓』の本文を付して、検討の為の資料とする。掲出し四年版『八幡愚童訓』の本文を付して、検討の為の資料とする。掲出し四年版『八幡愚童訓』の本文を掲げ、それに相当する寛文以下に、『宇佐八まんのゆらい』の本文を掲げ、それに相当する寛文以下に、『宇佐八まんのゆらい』の本文を掲げ、それに相当する寛文

した。しかし、見方によりゆれも存し、必ずしも精確ではない。詳しくい箇所を目安として( )でくくったが、やや長くなる所は点線……とい箇所を目安として( )でくくったが、やや長くなる所は点線……とも、煩瑣になるので掲出していない。 とうれていないので省いてある。また、登場人物名や断片的な 一致 などわれていないので省いてある。また、登場人物名や断片的な 一致 などわれていないので省いてある。また、登場人物名や断片的な 一致 など

は、それぞれの本文を参照されたい。

魔輪といふもの(かたちは鬼神のごとく身の)色はあかく。かうべはぞ、わたりける。) (『宇佐八まんのゆらい』P8下L3~)がぎやう(第一の。まへんたり。)……こくうんに打のり。(日本さしてしぎやう(第一の。 けつし物。(せいたかく)色あかく。かしら八つにして。

2 (むかし、)かいくわ。天わう(のぎように。)廿まん三千人。事かきりなし。) (『八幡愚童訓』P毀L2~) 不にして黒雲に乗て。こくうをとびて(日本につき。人民をとりころす

(人王第九) 開化天皇(四十八年に。) 二十万三千人(『宇佐八まんのゆらい』 P84上L6~)(『宇佐八まんのゆらい』 P84上L6~)

(『宇佐八まんのゆらい』 P8上L10~)の。ふつほうしゆじやう。いかでか、しんこくを、かたむけん。三千さのじんぎは。百わうしゆごの。けんひをならへ、大小し しゃ う3 三かんのともから、日本にしたかふ。(なんぞ)我かてう、(忝も。)(『八幡愚童訓』 P9L16~)

の神祇は百王しゆごの権扉をならべ。大小乗の仏法衆生(与楽の教跡を三韓は此土に帰すといへとも。わか朝(いまた他国に属せす)三千座

・ ヒニトダうから、大色は。トルニつは。、ハニトナルで、戻くそれ。国をかたふけむ。 (『八幡愚童訓』 P92L1~)つたふ。神明擁護をこたらず。仏陀の 冥助やむことなし。)いかてか神つたふ。神明兼が

もろ共に、つれゆき給へと、申さるゝ。

(『宇佐八まんのゆらい』 P8下L5し)

5 ちんりん、まなこをいからかし。(『八幡愚童訓』P916~)ともなひ給ひけり。 (『八幡愚童訓』P916~)たとひ女人の身なりとも。一の失はなとかはふせがざるへきとて出立

今をかぎりの御時。御后にむかはせ給ひ。誠に、しやうしや、ひつめぢんりん目をいからかし。 (『八幡愚童訓』P93L14~)

宝算もかきりとなり給ふ。(御心ぼそくおほしめしければ?)后の御手に。やどりしは、わうじ也。(『宇佐八まんのゆらい』 P8下L9~)、いくるしさ。ひとかたならず、はんへる也。さりながら、 た い な いさ心くるしさ。ひとかたならず、はんへる也。さりながら、 た い な いことさら御身は)、只ならぬ身にてなし。はや三月かと、 覚たり。 いとことさら御身は)、只ならぬ身にてなし。はや三月かと、 覚たり。 いとことさら御身は)、只ならぬ身にてなし。させん上下を。きらはずといへつのならひ。あいべつりくのなげきは。きせん上下を。きらはずといへつのならひ。あいべつりくのなげきは。きせん上下を。きらはずといへつのからかぎりの御時。御后にむかはせ給ひ。誠に、しやうしや、ひつめ

のちきりと申。まして、(きみとみづからは。)たしやうおつこうのよしのちきりと申。まして、(きみとみづからは。)たしやうおつこうのよしのちきりと申。まして、(きみとみづからは。)たしやうがりとなりと申。となり、御きさき。やうく、心を取なをし。こはうらめしき。ればいとゝ御くるしさ。一方ならすこそおほゆれ。去ながら子のはらまれたまふは皇子なり。一方ならすこそおほゆれ。去ながら子のはらまれたまふは皇子なり。でがならみ御事になり。三月になるとやらんおほゆればいとゝ御くるしさ。一方ならすこそおほゆれ。去ながら子のはらまれたまふは皇子なり。

て)一樹のかげにすみ一河のなかれをくむだにも七生までのちきりなり。(皇后の御いもうとの豊姫と御手を取くみ。御なみだをながさせ給ひ(『宇佐八まんのゆらい』 P87上L4~)

でんのかへにいのり。ゑんのふのふすま。せんしうをかさね。ひよくのみ。よわひを、ふらうもんの内に。ともなひ、ことぶきを。ちやうせひ

まくら。ばんしゆんをならべんとこそ。ぞんぜしに。

らへんとこそ祝しに。 生殿の上にいのる。鴛鴦のふすま千秋をかさね比翼のまくら。万春をなればる 后のくらゐにそなはりて。)よはひを不老門のうちにともなひ。寿 を長い 戦にむかはんとおもふことはりよくくく心得給ふべし。廿三の年よりも いはんや(兄弟姉妹のむつひは)たしやう億劫のよしみなり。(我此合 (『八幡愚童訓』P9L13~)

(『宇佐八まんのゆらい』 P88上し13~)

8 たとへ女人の身なり共。やさきに立ふさがり。あらきかぜをもふせが んと。是までともないまいらせしに。(其かいもなく。かゝるふぜいに

なし奉り。) 君をさきだて。我が身は何と成べきと。 (『宇佐八まんのゆらい』 P87上 12~)

れまてともなひ参らせ候つるに。はからざるに我か身残て、君は先立給 女人なり共矢さきに立。あらき風をも先ふせくへしと思ひてこそ。こ (『八幡愚童訓』 P9L14~)

(ばんみんのかなしみ。たとへていわんかたもなし。) すでに三くわう。 なきがごとくにて。 きさきのみやの。 御 な げ き、

し。たけうぢ(しさつて。ま事太神ぐうにて。ましまさば。)一つのしる たる、いそぎ。日本のちに。つかぬさきに、いこくに、むかい 給ふへ **貴賤のかなしみも常の篇にこえたり) (『八幡愚童訓』 P9117~)** …御ぐしを、ひたさせ申せば。(ふしぎや。かわみづ、二つ にわ かっ じんぼうを。おどろかし給はば。そのずい、たちまち、あら わる べし ましたまはん。その時、) さか木の。えだに、すゞをつけ。てうていの たつて。御ぐしをわくべし。その時、御心ほんぶくなるべし。(是一つ 御ぐしを。川にひたしたまはば。すいじんによ、りうしんによ。二人き しを、みせ給へ。(ときに、どうじ)のたまはく。(まづくわうぐうの。) でに。十万八千そうの。ふねをうかべて。すまんのぐんびやう。よせき て。)すいじん、りうじん。二人のどうによ。あらわれいで。(御ぐしを と。(あらたに、しんたくましまして。かみはあがらせたまひける。) … のあゆ。あかるべし。(このうをゝ、しよくしたまへ、いよくくせいき のずいそうなり。)さてまた。一つのつりを。うみに入れよ。三じやく 我はいすゝ川の。ほとりにすむ。あまてらすおんがみ也。三かん、す 三光すでになきがことし。皇后の御なげきも。(よのことはりにすぎ。 (『宇佐八まんのゆらい』 P87下L11~)

たれ給へば。三じやくのあゆ。二つはりにかゝつて。あがりける。 そろへ申て。)……(かさねて、)しんたくにまかせ。(一つの)つりを

> 11 さか木のえだに。すゞをつけ。御てにさゝげ。すでに六日の。其間、 と。さまくくいさめ給へ共。御身をたばわす、一しんに、御き とう あ ならぬ御身にて。さのみはいかで。ござあるべし。すこし や す み 倭へ くごをまいらす。(もすそを、なみにひたして、)たちたまふ。……たゝ 参り。(御ぐしを二つにわく。) 尺の鮎二くひつきてあがる。御ぐしを川にひたせは水神竜神二人の童女 て(御心。本に復し給ひけり。)神託にまかせて針をうみに入給へは。三 ぼりて)朝廷の神奉をおどろかし申給へ其瑞たちまちにあらはるべしと のあゆくいつきてあかるべし。御髪を川に入給はゝ水神女竜神女二人来 をはなち。十方をてらして)のたまはく。一のはりをうみに入よ。三尺 かぬさきにいそぎ異国に向ひ給ふへきとそ仰られける。武内(さらは) のふねをうかへて。数万のぐんびやうたゞいまきたらんとす。此地につ て御髪を二つに分べし。さかきのえだに大鈴をつけて。(山のだけにの 一のしるしを見せ給へ(と申さるゝ御ことばのおはらぬさきに。ひかり 我は五十鈴川のほとりにすむ天 照 太 神なり。三韓すてに十万八千艘 (『宇佐八まんのゆらい』 P89上L8~) (『八幡愚童訓』P95L2~)

供御もまいらすして立とをし給へは。(近つき給へる二人の御妹の申給いかのえだに大すゞをつけて御手にさゝげて立給ふ事六日。其間に終にいる。 と。けんし給ふ。(是すなわち。すみよし大みやうじん也。くわうぐう して。(こくうざうぼさつ。あまくだらせたまひ。そのまゝ、) おきな 子に。月神と申もの侯。心かうにして。ちからつよし(このたびの。大 に。まいりたり。) いくさは、大しやうぐんをさきとす。 それがしか一 いぞく、たいじのため。大ぐわんを、おこしたまふゆへ。ちからをそへ く。われはこれ、ぢじん五代。ひこなきのみことなり。(くはうぐう、 に、御らんじて。いかなる人にてましますぞ。) おきな、こたへて いわ し。のどかなりけるけしき也。そのとき、)くわうみやう、かくやくと ばゝすして。御祈禱二ごゝろぞなかりける。 なり。御やすみなんとあるべしといさめ申たまへとも。さらに御身をた ひけるは。) さのみはいかゝかくてはおはしますへきぞたゞならぬ 御身 第七日と申に。こくうに、(おんがくきこへ。花ふり、いきやうくん (『八幡愚童訓』P95L13~)

しやうに。) かれをめしつれたまふべし。

す。我か子月神といふは、力つよく心たけし。是を参らすべし。はく。われはこれ地神第五の彦波澈の尊なり。いくさは大将軍をさきとは空蔵菩薩また俗躰と成給ふ。其かたち)翁仙人のごとし。此俗のたま第七日は虚空に光明みち(《て(光明すなはち虚空蔵ほさつとなる。第七日は虚空に光明みち(《宋佐八まんのゆらい』 P8上L8)

月神(空中より出て)御かんむりに赤衣をめし平箙をおひ(かぶら矢ふ。) (『学佐八まんのゆらい』 P纫上L9~) さへ、(くもに、うちのりたまひつゝ。) おんまへにまいらるゝ。……それかしは、いとま申と、の給へば。くわうぐう。 (しばし と、とめ 給れかしは、いとま申と、の給へば。くわうぐう。 (しばし と、とめ 給れかしは、いとま申と、の給へば。くわうぐう。 (『八幡愚童訓』 P歿L2~)

二に)御弓取具してもたせたまひて前におはす。……住吉はさらばいと

…… (せつなの間に。かしまのうらに。きゆうちやくし。いそらに、た る。時に、)すみよし、御ふねは、しゆつらい仕侯。かんどりに は。た こほりにて。大せん四十八そう、つくらせ。(くはうぐうの御めにかく まりよを。ねいる物なれば。五十日六十日なんども。おきあがらぬほと時いそら、少。 かほゝもたけ。)我かいていに。 ねんぢよをおくり。あ 人くわんを、さづけつかはさんと。ふじ大しん。つらやすと。なつけ、 人をめさるべし。(則、ちよくしには、月神まいられよ。)さりながら。 のいそらといふ。かいちうにすみて。うみあんないしやにて候へば。此 かるべし。其儀ならば。とうじ、ひたちの国。(かしまに罷ある。)あべ れをかなさるべき。たけうぢ申されしは。いつれにても。御はからひし き。おなじくはたすけ給へとねんごろに申させ給ひしかば。 ま申すとて。(天にあがらむとしたまふを)皇后(いかゞ見すて給ふへ るしく候ゆへ。さてこそ、ふして候と。……三となてさせ給へば。 に。もろ~~のせきくわひ、せかほに。すいつき。あまりおもて。みぐ に、ふして。御返事なし。(つらやす、さて。ちよくとうはいかに。其 ふ。かん取のために。まいらるべしとぞ、申さるる。いそら、うつぶし いめんあつて。) じんぐうくわうぐう。 いこくせいばつに。 むかは せ 給 ながとの国。ふなきの山より。ざいもくを出し。ぶぜんの国。うさの (『八幡愚童訓』P9L5~)

> どりのために参りたまふべしと仰ければ。やがてうつふしに臥て御返事 けてやるべしとて。藤大臣連保と名づけて。(いそらがもとへつかはす くも天神なり。いかでか人王のつかひとはなすべき。)さらば官をさづ 我は大海に年序をおくりあまり夜をゐねるものなれば。五十日六十日ななし。(いかにや~~と宜旨の勅答なにと申べきぞと再三せめられて。) に須臾の間に行着て。) 神功皇后異国征罸のためにむかはせ 給 ふ。かんいる れしを。すみよし大きにしかりたまひてのたまはく。月神はかたじけな すべて行へきものなしさりとては月神をやりたてまつらんと。武内申さ 申されしかば。(それをめさんにはたれをかつかはすへきとありしに。 さるべし。(それぞ年久しく)海中に住て。うみのあんなひ者にてあると かば。武内の申されしは。いつれの人にても(住吉の)御はからひ有へ 給ひけるは。)御船は出来ぬ。梶取にはたれをかせさせ給ふべきとありし て。いまぞかほかろくなりたるとておきあがり給へども。) つきて、あまり面見ぐるしきときふして候なり。(御手をもつてわがか んともおきあからぬほどに。もろく〜の石花びせといふものかほにすひ しと申されしかは当時は常陸国(の海底にある)安曇の磯郎といふ人をめ ほをなて給へと申されしかは高郎)三度なで給ふに(石花びせ少々をち (四十八日に)四十八艘の御舟をそつくりける。……すみよし(申させ 長門の国ふなきの山に入て。材木をいたし。豊前の国うさの 郡に てなど (『宇佐八まんのゆらい』 P%下L9~)

彼成べし。 (『字佐八まんのゆらい』 P兒上L2~)かのたまを、かりうけたまはば。ちからをつくさず。いぞくがうぶくかのたまを、かりうけたまはば。ちからをつくさず。いぞくがうぶく。(『八幡愚童訓』 P鈴L1~)

15

(『八幡愚童訓』P97L12~)かの珠をかりて。ちからをつくさずして、異賊をがうぶくせばや。

ぎず。) (『宇佐八まんのゆらい』P3上L9~)の。身ながら。忝も、人わうを。(むこにとらんこと。大けい。是にすせいの。国をまもり。いかでせんしを。そむくべき。其 う へ、り う 女つくして、のべ給ふ。) りうわう、もとよりこんしんにて。けんの ふ ぢ(たんじやうの後は。) りうわうのむこに。そなへ申さんと。(ことばをたねじやらの後は。) りうわうのむこに。そなへ申さんと。(ことばをたれじやらの後は。) りうしうのむこに。そなへ申さんと。(ことばを

とくく、おちうせ。いまぞまことの、めんしよく也。)

玉の成分によるならば(敵国がうぶくうたかひあるべからず。竜王たまをかすならは) 我か腹にやどらせ給ふは皇子なり。 竜王の御む こにまをかすならは。 我か腹にやどらせ給ふは皇子なり。 竜王の御む こにまをかすならは。 我か腹にやどらせ給ふは皇子なり。 竜王の御む こにまをかすならば。 教か腹にやどらせ給ふは皇子なり。 竜王の御む こにまをかすならば。 教か腹にやどらせ給ふは皇子なり。 竜王の御む こにまをかすならば。 敵国がうぶくうたかひあるべからず。 竜王た玉の成分によるならば。 敵国がうぶくうたかひあるべからず。 竜王た玉の成分によるならば。 敵国がうぶくうたかひあるべからず。 竜王た玉の成分に

(『八幡愚童訓』P回L5~)ものをいふやうに(くどき)申させ給ひければ草のかけにても(御覧し。)遠きまもりとならせ給へと。生たる人に草のかけにても(御覧し。)遠きまもりとならせ給へと。生たる人に本り候と。)いきたる人に、の給ふごとく。(あららかに)の給へ共後でいた、の給ふごとく。(あららかに)の給へ共に、の給ふごとく。(あららかに)の給へ共に、の給ふごとく。(ののように、の給へとまごいに、「八幡愚童訓』P回L7~)

いかに、たいないのわうじ。日本のあるじと也給はゞ。今一月、たい四十九万六千余人あり、鶴翼のかこみをなし。魚鱗のぢんをはる四十九万六千余人あり、鶴翼のかこみをなし。魚鱗のぢんをはるに。ぢんをかまへ。 (『字佐八まんのゆらい』p9下L4~)に。つがふ)四十九万六千よき。くわくよくのかこみをなし。ぎよ りん

ないに、おはしませ。

ると。あららかに、の給へば。) 御はらの内より。(ふしぎや、御返事

(御身のちゝてい王の。かたきをうつて、参らす

を。被成ける。) 十月になれば。立なをり申也。いくさしづまるまでは。 (心やすかれと、) (『字佐八まんのゆらい』 P59上18/2、 (心やすかれと、) (『字佐八まんのゆらい』 P101 L2 2 2) しく候。) (『八幡愚童訓』 P101 L2 2 2) しく候。) (『八幡愚童訓』 P101 L2 2 2) しく候。) (『八幡愚童訓』 P101 L2 2 2) しくくの) (『八幡愚童訓』 P101 L2 2 3) しくくの) になみ、ひらせ。(さしもの大かい。ひやらくくとしたる。) くが ぢと ほなみ、ひらせ。(さしもの大かい。ひやらくくとしたる。) くが ぢと はなみ、ひらせ。(さしもの大かい。ひやらくくとしたる。) くが ぢと はなみ、ひらせ。(さしもの大かい。ひやらくくとしたる。) くが ぢと はなみ、ひらせ。(さしもの大かい。ひやらくくとしたる。) くが ぢと

水を出す玉なれば。)かいすい。にわかにわき出。

早珠すでにうみに入しかは。うしほみな干て陸地となる。異国のぐん

(『宇佐八まんのゆらい』 P9下上3~)

又青色の玉を入給ふに。海水みなきりて。にあるゆへに。水を出してうかへたり。異賊をはるかに見くだ し て。びやうよろこんで。ふねよりおりてせめ来る。(日本のふねをば小竜下びやうよろこんで。ふねよりおりてせめ来る。(日本のふねをば小竜下

(『八幡愚童訓』 PML2~)

、(其しるし。)今のよまでも、有とかや。 は、できらん。まつたく、けだいすべからす。もし、てきしん有いと、なないし。いぬと、也候共。日本のごをん、わすれましと。かうさに。だざいし。いぬと、也候共。日本のごをん、わすれましと。かうさにおゐては。天道のせめを。かふむるべし。(たとはば、ちくしやう道におゐては。天道のせめを。かふむるべし。(たとはば、ちくしやう道におゐては。天道のせめを。かふむるべし。(たとはば、ちくしやう道におゐては。天道のせめを。かふむるべし。(たとはば、ちくしん有くを、それへ奉らん。日本にしたがい。)まいねん、八十そうの。御ねん

(我等日本の犬となり日本をしゆごすべし。)毎年八十艘の御年賞をそなへ奉るべし。まつたくけだいすべからず。若敵心あらは天道のせめをまた。日本のいぬなりと書つけさせたまひ……(此石の文末代の恥なりとは、日本のいぬなりと書つけさせたまひ……(此石の文末代の恥なりとて。焼うしなはんとしけれ共いよく、あさやかに成て)今にきえず有とて。焼うしなはんとしけれ共いよく、あさやかに成て)今にきえず有とて。焼うしなはんとしけれ共いよく、あさやかに成て)今にきえず有とて。焼うしなはんとしけれ共いよく、あさやかに成て)

(『宇佐八まんのゆらい』 P97下L9~)

- 52 -